〈随　　想〉

恩　師　の　魅　力

科学技術教育部　**小荒井　　要**

過日，20年ぶりで尊敬していたある恩師に会うことができた。
もう，70才をこえて話しの歯切れも鈍っていて決して雄弁ではなかったが，むかし以上に豊かな個性と，気品と情熱に溢れていて，人間としての魅力を感じさせ，畏敬の念でいっぱいであった。

人間の魅力は，出そうと思ってもそう出せるものではない。自然に滲(にじ)み出るものである。
無理につくろうとすれば，気ざに嫌らしく見えるものである。また，決して長続きするものでもない。

人間としての，ほんとうの魅力は「吸収されつくした教養」とか「試錬に耐え抜いた人生観」から滲み出てくる感覚とか個性にあるように思う。

そういう意味では，ある程度年輪を数えなければ，人間としての魅力は表れないのかも知れない。

戦後，価値観の転倒に，人が皆，葛藤の休まる日のなかったころ，師は気ままに訪れた私に声を震わせ「情熱」を説き，一つの音楽（レコード）を聴かしてくれたことがある。

一曲終わるまでに，数々のＳＰ板をかけ継ぎして小一時間程かかったと思う。音楽を知らない当時の私にとっては，大変退屈で苦痛な時間であったが，終わってから静かに目を開いて唯(ただ)ひとこと，「よかったね。」と聞かされて，戦前，戦中，戦後を通した教育者としての苦悶を知らされた思いで，慄然(りつぜん)とした。

師もまた，非常な時代の流れと変転する想世界の決定的な試錬に耐え，日々生きる理想を真摯(しんし)に思索してあられたように思う。その帰結として，謙虚に，執拗(しつよう)に「情熱」を説いてくれたものと思う。

師は，必要以上に知識を語ることがない。もち論，誇示することは一切しない。それでいて専門的知識は無論のこと，実に深く，広い知識を持っている。

そして，それが十分に消化吸収されていて，その自信が，一つの気品とか，風格となって微妙に表れてくるのであろうか。

言葉づかい，身なり，態度に，いや味がまったくないということである。
多くの人が，ためらう深刻な話も何げなく，さらりと言ってのける。
それでいて，不仁，不浄とみれば敢然と反発してくる。実に豊かな個性と洗錬された感覚が充溢(じゅういつ)している。

いま，私は気負う考えはまったくないが，唯，近代の社会は体制の如何を問わず「人間性」と「没主観性」の要求が交錯している。その中で真に「魅力ある人間像」について素直に自分自身に問いかけている。「魅力ある教師像」について問いかけている。

私から見た師は，魅力いっぱいの「良き師」である。「好きな先生」とは次元の高さを異にする。本質を異にする。……師は私にとって「理想の教師像」であったのかも知れない。

無論，私が師の巨峯に達することは，終生，彼岸の希(ねが)いではあるが。